

# 蘇軾詩注解（三十三）

山本和義  
蔡毅  
中裕史  
中純子  
原直枝  
西岡淳

（南山読蘇会）

中国宋代の詩人蘇軾の以下の作品について注解を施す。括弧内の数字は東北大学中国文学研究室作成『蘇東坡詩作品表』による通し番号。

子由 新たに汝州の龍興寺の呉が画ける壁を修す（二〇〇七）

高郵に過りて孫君孚に寄す（二〇〇八）

僕 至る所未だ嘗て出でて游ばず。長蘆を過ぐるとき、夫禪師病甚だしと聞く。一たび問わざる可からず。既に見ゆれば則ち問ゆる有り。明日 風に阻まる。復た留まって之に見え、三絶句を作りて聞復に呈す。并びに

請いて転じて参寥子に呈して各おの數首を賦せしむ(二〇〇九〜二〇一一)  
六月七日、金陵に泊して風に阻まる。鍾山泉公の書を得たり。詩を寄せて謝を為す(二〇一二)

清涼寺の和長老に贈る(二〇一三)

予 前後余杭に守俸たること凡そ五年。夏秋の間、蒸熱 過すべからず。独り中和堂の東南類は、海門を下  
瞰し、万里を洞視し、三伏にも常に蕭然たり。紹聖元年六月、舟行して嶺外に赴くに、熱 甚し。忽ち此の処  
を憶うて、是の詩を作る(二〇一四)

慈湖夾にて風に阻まる 五首(二〇一五・二〇一七・二〇一九)

廬山の下を過ぐ 并びに引(二〇二〇)

二〇〇七(施三四―四四)

子由新修汝州龍興寺吳畫壁

子由 新たに汝州の龍興寺の吳が画ける壁を修す

- |   |         |                        |
|---|---------|------------------------|
| 1 | 丹青久衰工不藝 | たんせいひさ おとろ 工 こう 藝 あら   |
| 2 | 人物尤難到今世 | じんぶつ もつと こんせい いた がた    |
| 3 | 每摸市井作公卿 | つね しせい ほ こうけい な        |
| 4 | 畫手懸知是徒隸 | がしゅ へんか 是れ 徒隸なるを       |
| 5 | 吳生已與不傳死 | ごせい すで ふでん とし 死して      |
| 6 | 那復典刑留近歲 | なん ま てんけい きんさい とし      |
| 7 | 人間幾處變西方 | じんかん いくところ せいほう へん     |
| 8 | 盡作波濤翻海勢 | じんく ばとう うみ ひるがえ いきおい な |

- |    |         |                  |
|----|---------|------------------|
| 9  | 細觀手面分轉側 | 細かに觀れば 手面 転側を分かつ |
| 10 | 妙算毫釐得天契 | 妙に毫釐を算えて天契を得たり   |
| 11 | 始知眞放本精微 | 始めて知る 眞放は本と精微なるを |
| 12 | 不比狂花生客慧 | 狂花の客慧を生ずるに比せず    |
| 13 | 似聞遺墨留汝海 | 似かに聞く 遺墨 汝海に留むと  |
| 14 | 古壁蝸涎可垂涕 | 古壁 蝸涎 涕を垂る可し     |
| 15 | 力捐金帛扶棟宇 | 力めて金帛を捐てて棟宇を扶け   |
| 16 | 錯落浮雲卷新霽 | 錯落たる浮雲 卷きて新たに霽る  |
| 17 | 使君坐嘯清夢餘 | 使君 坐嘯す 清夢の余      |
| 18 | 幾疊衣紋數袷袂 | 幾疊の衣紋ぞ 袷袂を数う     |
| 19 | 他年弔古知有人 | 他年 古を弔す 知んぬ 人有らん |
| 20 | 姓名聊記東坡弟 | 姓名 聊か記さん 東坡が弟と   |

紹聖元年（一〇九四）、五十九歳の作。知定州の任を解かれ、英州（広東省）へ赴く途次に汝州（河南省）に在った。  
 ○子由 蘇轍（字は子由）は、紹聖元年四月に門下侍郎の職を解かれ、知汝州として汝州に在った。○新修汝州龍興寺吳画壁 蘇轍「汝州龍興寺にて吳画の殿を修する記」（『欒城後集』卷二二）に、「華嚴の小殿を觀るに、其の東西の夾は、皆な道子が画ける所なり。東は維摩・文殊為りて、西は佛成道為り。……筆跡尤も放なり。然れども屋瓦は弊れ漏れ、塗棧は缺け弛みて、幾ど風雨に侵されんとす」（夾は、正殿の両わきの部屋）と、蘇轍が龍興寺を訪れて目にした吳道子の壁画とその堂宇の様子が記されている。堂宇の修理は、蘇轍らの援助で行われた。記には五月二十五日の日付がある。吳は、唐の玄宗期の画家である吳道玄（字は道子）のこと。蘇軾「見る所の開元寺の吳道子

が画ける仏の滅度を記して以て子由に答う」詩の注（『蘇東坡詩集』第一冊三七一頁）を参照。この龍興寺の画壁については、葛立方「韻語陽秋」卷一四にも言及があり、「一壁は維摩示疾・文殊來問・天女散花を作し、一壁は太子遊四門・釋迦降魔成道を作し、筆法奇絶なり」とある。

1 ○丹青 赤と青の絵具、ひいては絵画をいう。蘇軾「水官の詩に次韻す」詩に、「丹青 偶たま戯れを為し、指を染めて初めて黿を嘗む」とある。その注（『蘇東坡詩集』第一冊二四〇頁）を参照。○工不藝 工は、画工のこと。藝は、才能があることをいう。『論語』雍也篇に「冉・求や藝」（冉・求は孔子の弟子のひとり）とあり、孔安国が「藝は才藝多きを謂う」と注している。2 ○人物尤難 張彦遠「歷代名画記」卷一「論画六法」の条に、「顧愷之曰く、「人を画くは最も難し。次は山水、次は狗馬なり。其の台閣は、一定の器耳にして、差や為し易きなり」とある東晉の画家顧愷之の言葉に基づく。3 ○市井 市井の人。すなわち町に住む庶民のこと。鮑照「行樂して城東の橋に至る」詩（『鮑氏集』卷五）に、「擾擾たる遊宦の子、営營たる市井の人」とある。○公卿 高位高官のこと。4 ○画手 画工のこと。杜甫「冬日洛城の北 玄元皇帝の廟に謁す」詩（『杜詩詳注』卷二）に、「画手 前輩を看るに、呉生（呉道子）遠く擅場」とある。○徒隸 刑に服している奴隸。『後漢書』隗囂伝に、「徒隸殷いに積もること数十万人、工匠飢え死して長安皆な臭う」とある。5 ○呉生 呉道玄（字は道子）のこと。詩題の注を参照。○与不伝死 輿義を伝えずに亡くなること。『莊子』天道篇に、「古の人は其の伝う可からざるものと与に死せり」とある。6 ○典刑 旧来のきまり、やりかた。「子由の「蔣夔が代州の学官に赴くを送る」に次韻す」詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊二二四頁）を参照。7 ○変西方 呉道子が極楽浄土をえがいた変相図。変は、変相のこと。西方は、西方浄土、極楽浄土をいう。蘇軾「地獄変相の偈」（『蘇軾文集』卷二二）に、「我れは聞く 呉道子、初めて豊都の変を作し、都人 罪業を懼れて、両月 屠宰を罷む」とある。8 ○尽作一句 呉道子の描いたどの絵にも、翻る海波のような筆の勢いがあることをいう。蘇軾「鳳翔の八観、王維・呉道子の画」詩（『蘇東坡詩集』第一冊四〇八頁）に、「道子は実に雄放、浩として海波の翻るが如し」と、その画風が述べられている。9 ○細観一句 『四河入海』卷一二の二に引く一韓智羽の問書に、「坡（ガ）言（フココロ）ハ、審細二呉ガ画ヲ見レバ、能ク人ノ手足ヲ画（キ）テ、表裏転側ノ形

ガ分明ナゾ。手面ト云（フ）ハ手ノ内ゾ」とある。転側は、ひねりかたむけること。白居易「繚綾」詩（『白居易集箋校』巻四）に、「異彩と奇文と相隠映し、転側 花を看れば 花定まらず」とある。10○妙算 理知の世界を越えたところまで読み取ること。陶淵明「士の不遇に感ずる賦 并びに序」（『陶淵明集』巻五）に「嗟乎、雷同して異を毀る、物 其の上を悪み、妙算者を迷えりと謂い、直道者を妄なりと云う」とある。○毫釐 ほんのわずかなこと。「呉道子が画の後に書す」（『蘇軾文集』巻七〇）に、「自然の数を心得、毫末も差わず」と、呉道子の絵を実物とわずかの違いもないと述べている。○得天契 天契は、天の創り出した姿、造物者が創り出したもの。一韓智翊の聞書に、「天契ハ、天符ゾ。言（フココロ）ハ、天ノ符契ヲ得テ、神通妙用ヲ得（ル）ヲ云（フ）ゾ」とある。11○真放 まことの豪放。皮日休「七愛詩 并びに序」（『全唐詩』巻六〇八）に、「逸気を負う者は必ず真放有り、李翰林を以て真放と為す」とある。○精微 繊細な精密さ。『荀子』賦篇に、「大なること天にも多及び、精微にして無形なり」とある。成公綏「嘯の賦」（『文選』巻一八）に、「精微は以て幽を窮め深きを測るに足る」とある。12○狂花 季節を違えて開く花。白居易「早冬」詩（『白居易集箋校』巻二〇）に、「十月 江南 天氣好し、憐むべし 冬景の春華に似たるを……老栢 葉は黄にして嫩樹の如く、寒桜 枝は白くして是れ狂花なり」（栢は山桑、嫩樹は若木のこと）とある。○客恵 一韓智翊の聞書に、「客恵ト云（フ）ハ、狂花ニツイテ云（フ）ゾ。真実ノ知恵デハナイゾ。フツト外ヨリデクル知恵ゾ」とあるのに従う。13○汝海 汝州をいう。白居易「劉汝州が侍中の長句を寄せられしに酬ゆるに和し……」詩（『白居易集箋校』巻三二）に、「洛川・汝海は封畿に接し、履道・集賢は來往頻りなり」とある。14○蝸涎 カタツムリの出す粘液。また、カタツムリが通つたところにその粘液でできる跡。作品番号一九二一の詩に、「魚沫 蘋渚に依り、蝸涎 綵楹に上る」とある。その注（『蘇軾詩注解（二十五）』を参照。15○力捐一句 金帛は、黄金や絹織物。白居易「洛下に卜居す」詩（『白居易集箋校』巻八）に、「三年 郡を典りて帰り、得る所は金帛に非ず、天竺の石両片と、華亭の鶴一隻なり」とある。『韻語陽秋』巻一四に、「子由曾て百練を施す」（練は、かとりぎぬ。詩書画をかくのに用いられた）とあるように、蘇轍が呉道子の絵のある龍興寺の堂宇の改修を援助したことをいう。詩題の注も参照。16○錯落 いらまじって乱れたさまをいう疊韻語。白居易「閑居偶吟、鄭庶子・皇甫郎中を招く」詩

〔白居易集箋校〕卷三六に、「古石 蒼くして錯落たり、新泉 碧くして縈紆たり」とある。17○使君 知事のこと。ここでは知汝州である蘇轍をさす。○坐嘯 仕事をせず、のんびりと坐つて詩を詠ずること。蘇軾「趙郎中相和せらるる……」詩に、「頗る老子を哀れんで日びに飲ましむ、君が為に坐嘯して画諾を主らん」とある。その注〔蘇東坡詩集〕第四冊一七頁を参照。○清夢 俗塵に汚されない清らかなころの人が見る夢。「章七が出でて湖州に守たるに和す 二首」その一に、「只だ応に未だ君恩の重きに報せず、清夢 時時 玉堂に到るべし」とある。その注〔蘇東坡詩集〕第三冊五九二頁を参照。18○幾畳一句 壁に描かれた維摩詰・文殊菩薩・釈迦などのまとう法衣の幾重にもなった鬘や、衿、袂の形までもはつきりとみえるようになることをいう。一韓智翹の聞書に、「見事二修（シ）タル程二、仏ノ衣紋モ衿袂モ、キツカトシテ数（ヘ）ツベキゾ」とある。19○弔古 いにしえの人物や事件に感慨をもよおすこと。李端「友人を送る」詩〔御覽詩〕に、「聞説く 湘・川の路、年年 古を弔すること多し」とある。

画道が衰えてこのかた才能のある画工もおらず、よい人物画を描くのは今においてもとりわけ難しい。町人と公家も描き分けられぬようでは、絵描きたちはどうやら地に落ちてしまったとみえる。

呉道子はその画道を伝えぬままとつくに世を去り、いまや輿義も残されていない。世間にはいくつか（呉道子の）変相図があるが、どの図にも海の波濤をひるがえすような筆の勢いがある。

子細にみると、手の表情はどこからみても明瞭で、理知を越えた巧みさによって、天が造りだしたものを寸分違わず描き出す。まことの豪放とはこうした精緻さが裏付けているのだ。狂い咲きの花のその場かぎりの華やきなどその比ではない。

汝州の龍興寺に残されたと耳にした（呉道子の）作品は、古壁にカタツムリが這った跡がある嘆くべきありさまだった。きばって財を投じ堂宇を修復し、（汚れていた壁は）乱れ飛ぶ浮雲が払われて晴れ上がったかのように鮮やかになったばかり。

汝州の知事どのはのんびりと詩を吟じ、清らかな夢からさめると、(壁に描かれた) 仏の衣の袈びだまでがくつきりとあざやかによみがえる。後世 古いにしえに想いをはせて訪ねてくる者がきつとあろう。(そのときのために、改修の記録の) 姓名に東坡の弟とでも記してもらいたいものだ。

(担当 中 純子)

二〇〇八(施注三四―四五)

過高郵寄孫君孚

高郵こうゆうに過よりて孫君孚そんくんふに寄よす

- 1 過淮風氣清 わい 淮を過ぎて風氣清く
- 2 一洗塵埃容 じんあい 塵埃の容を一洗す
- 3 水木漸幽茂 すいぼく 水木 漸く幽茂として
- 4 菰蒲雜游龍 こぼ 菰・蒲 游竜を雜す
- 5 可憐夜合花 あわ 憐れむ可し 夜合の花
- 6 青枝散紅茸 せいし 青枝 紅茸を散す
- 7 美人游不歸 びじん 美人 游びて帰らず
- 8 一笑誰當供 いつしやう 一笑 誰にか當に供すべき
- 9 故園在何處 こえん 故園 何れのか處にか在る
- 10 已偃手種松 すで 已に偃す 手ら種えし松

- 11 我行忽失路  
我が行 忽ち路を失う  
12 歸夢山千重  
歸夢 山 千にも重なる  
13 聞君有負郭  
聞く 君に負郭有りて  
14 二頃收橫從  
二頃 横從を収むと  
15 卷野畢秋穫  
野を卷いて秋穫を畢う  
16 殷牀聞夜春  
牀を殷わけて夜春を聞く  
17 樂哉何所憂  
樂しき哉 何の憂うる所ぞ  
18 社酒粥面醲  
社酒 粥面 醲たり  
19 宦游豈不好  
宦游 豈に好からざらんや  
20 毋令到千鍾  
千鍾に到らしむること毋かれ

紹聖元年（一一〇九四）、五十九歳の作。

○高郵 今の江蘇省高郵市。○孫君孚 孫升のこと。君孚はその字。高郵の人。元祐年間には集賢院学士の職と知応天府の官を賜ったが、紹聖の初めに左遷されて、査注によれば、蘇軾が高郵に至った時は歸州にあった。『宋史』巻三四七に伝がある。歸州は、今の湖北省秭歸県。

1 〇淮 淮河。○風氣 空氣、あるいは空氣の流動によって生じる風。陶淵明「庚戌の歳九月中、西田に早稲を穫る」詩（『陶淵明集』巻三）に、「山中 霜露饒く、風氣も亦た先んじて寒し」とある。2 〇一洗 すっかり洗い流すこと。

杜甫「鳳凰台」詩（『杜詩詳注』巻八）に、「再び中興の業を光かせ、蒼生の憂いを一洗せん」とある。3 〇水木 一旬水木は、水辺の木立。白居易「幽居 早秋の閑詠」詩（『白居易集箋校』巻三三）に、「幽僻たり 鬢塵の外、清涼たり 水木の間」とある。幽茂は、薄暗く茂ること。韓愈「郴州の李使君を祭る文」（『韓昌黎集』巻二二）に、「大亭

を空しゅうして以て処おかれ、水木の幽茂いひこなるに憩う」とある。4〇菰蒲こも一句 菰は、マコモ。水辺に群生するイネ科の多年草。蒲は、ガマ。游竜はタデ。『詩経』鄭風「山有扶蘇」に、「山に喬松有り、隰さかに游竜有り」とある。56〇可憐・青枝二句 夜合はネムノキ。夜になると葉を閉じ合わせる。茸は、にこげ。ネムは淡紅色の糸状になった花をつける。白居易「東牆の夜合樹 去秋 風雨の摧く所と為れり。今年 花時 悵然として感有り」詩『白居易集箋校』卷一七)に、「碧萋へきせい 紅縷こうる 今何くにか在る、風雨に飄り將りて去りて回らず」とある。碧萋は、あおい新芽。紅縷は紅い糸状の花。7〇美人 才徳のすぐれた人。『詩経』邶風「簡兮」に、「云に誰をか之れ思う、西方の美人」とある。李白「禪房に友人岑倫を懐う」詩『李太白全集』卷一三)に、「美人 竟ついにに独り往く、而して我れ安くんぞ能く群れんや」とある。本詩では孫升をいう。〇游不帰 旅に出て帰らないこと。『列子』天瑞篇に、「人の、郷土を去り、六親を離れ、家業を廢し、四方に遊んで帰らざる者有り。何人ぞや」とある。陸機「擬古詩十二首、青青たり河畔の草に擬す」(『文選』卷三〇)に、「良人 遊びて帰らず、偏棲 独り隻翼」とある。蘇軾は、「趙郎中 莒県に往き、月を逾えて帰る…」詩『蘇東坡詩集』第四冊一三六頁)で、「東隣の主人 遊びて帰らず、悲歌 夜夜 春相を聞く」と詠じている。8〇一笑一句 孫升が帰州に赴任していて高郵に不在のために、合飲の花がきれいに咲いても見てくれる相手がないことをいう。蘇軾は、「寓居せる定惠院の東に、雑花 山に満つ。海棠の花一株有り、土人貴きことを知らざるなり」詩『合注』卷二〇)に、「嫣然として竹籬の間に一笑すれば、桃李 山に漫ちるも総べて麤俗なり」と詠じている。一韓智翹は、「今、君父ハ仕官シテ帰ラザル程ニ、貴方ニ此処デアハヌ程ニ、我が一笑ヲバ、誰ガ為ニ開クベキゾ」と記して(『四河入海』卷一の三三)、蘇軾が笑みを交わす相手がないことをいうと解しているが、ここでは取らない。誰当は、宋本と施注では当誰につくるが、ここでは『合注』にしたがう。9〇故園 ふるさと。白居易「寒食」詩(『白居易集箋校』卷二九)に、「故園 何れの処にか在る、池館 東城の郎」とある。10〇已偃一句 偃は、松が上に伸びずに、枝を横に伸ばすこと。蘇軾は、「行きて宿・泗の間に徐州の張天驥に見えて旧韻に次ぐ」詩(『蘇軾詩注解』(二二三))に、「孤松の早つとに偃すは 元と病めるに非ず、倦鳥の還ると雖も 豈いかに是れ休せんや」と詠じている。その注も参照。手種は、手ずから植えること。蘇軾は、少年のころ、数万株の松を植えて育

てた。「予 少年なりしとき、頗る松を種うるを知る。手づから数万株を植え、皆な梁柱に中れり。……」詩(同上)も参照。11○失路 栄達の道を外れていること。蘇軾は、「劉景文が贈らるるに和す」詩(『蘇軾詩注解(十七)』)に、「路を失いて 今 喻等と伍を為す、詩を作りて 猶お建安の初めに似たり」と詠じている。その注も参照。12○山千重 蘇軾は、「雪を霧猪泉に祈り、城を出でて馬上に作りて舒堯文に贈る」詩(『蘇軾詩注解補(二)』)に、「三年呉越に走る、踏んで遍し 千重の山」と詠じている。施注と王本では千山重につくるが、ここでは「合注」にしたがう。13 14○聞君・二頃二句 負郭は、負郭田すなわち城郭を背にした田。一頃は、百畝の広さをいう。横従は、よこたとて。『詩経』齊風「南山」に、「麻を藝うるに之を如何せん、其の畝を衡従にす」とある。衡は横に同じ。『合注』では横縦につくるが、『詩経』を踏まえて宋本や施注、王本にしたがう。15○卷野 勢いよく進むさま。卷は、捲に同じ。秋穫は、秋の穀物の刈り入れ。『漢書』食貨志に、「春には耕し、夏には耘り、秋には穫り、冬には臧す」とある。16○殷牀一句 殷は、音声がひびくこと。杜甫「大雲寺賛公の房 四首」その三(『杜詩詳注』巻四)に、「梵は放たれて時に寺を出で、鐘は残りて仍お牀を殷わす」とある。夜春は、夜に穀物を白でつくこと。李白「五松山下の荀媪の家に宿す」詩(『李太白全集』巻二二)に、「田家 秋 作苦、隣女 夜春寒し」とある。17○樂哉一句 韓愈「夜歌」(『韓昌黎集』巻一)に、「樂しき哉 何の憂うる所ぞ、憂うる所は我が力に非ず」とある。18○社酒一句 社酒は、『東京夢華録』巻八「秋社」に、「八月秋社には、各おの社糕・社酒を以て相饗送す」とあり、秋社の祭りの際に進物として用いられた。粥面は、宋・蔡襄『茶録』点茶に、「茶少なく湯多ければ則ち雲脚散じ、茶多く湯少なければ則ち粥面聚む」とあり、濃厚な茶や芳醇な酒の表面が薄い膜状になっているのを粥の表面にたとえていった。醸は、酒が濃いこと。19○宦游 役人として地方に赴くこと。20○千鍾 俸禄が厚いこと。またその身分。『史記』魏世家に、「魏成子は食禄千鍾を以て仕の九は外に在り、仕の一は内に在り」とある。

淮水を過ぎて南に至ると空気がすがすがしく、旅の埃にまみれたこの身を洗ってくれるようです。この辺りになると水辺の草木も多く茂っており、マコモやガマの間に蓼が生えています。

しおらしいのは合歡の花、あおい枝にあかい花を点じています。でも才徳すぐれた孫升どのは赴任されたまま戻らず、きれいに咲いても見てくれる人とていないのです。

なつかしい故郷はどのあたりでしょうか、手ずから植えた松も今ごろは枝を横に伸ばしていることでしょうか。わたしの人生はにわかにな道を失ってしまい、帰ろうにも山々に遠く隔てられてしまっています。

あなたはここ高郵の城外に良い田をお持ちで、二頃の田で縦横に収穫があると聞きました。秋には威勢よく刈り入れが行われ、夜になると白づく音が寢床にまで聞こえてくることでしょうか。

楽しいではありませんか、心配事などありはしません。秋祭りの酒はとろりとして濃厚です。外地に赴任するのも悪くありません。それよりかまえて高禄の身分にはおなりになりませんように。

(担当 中 裕史)

二〇〇九〜二〇一一(施三四―四六―四八)

僕所至未嘗出游過長蘆聞夫禪師病甚不可不一問既見則有問矣明日阻風復留見之作三絕句呈聞復并請轉呈參寥子各賦數首

僕ぼく 至いたる所未ところだ嘗いまて出いでて遊あそばず。長蘆ちやうろを過すぐるとき、夫お禪師ぜんじ病やま甚はなだしと聞きく。一ひとたび問とわざる可べからず。既すでに見みゆれば則すなわち問いゆる有あり。明日あした 風かぜに阻はまる。復またた留とどまつて之これに見みえ、三さん絶句ぎよくを作つくりて聞復もんぷくに呈ていす。并ならびに請こいて転てんじて參寥さんりよう子しに呈ていして各おのの数首すうしゆを賦ふせしむ

紹聖元年(一〇九四)、五十九歳の作。

○長蘆 長蘆寺のこと。范成大『呉船録』(巻下)九月丁巳(二十一日)の条に、「長蘆に泊す。……此これ菩提達磨ぼだいだるまの

一葦いちいをば浮かべて渡りし処ところなり。寺は沙州の上に在り、甚だ雄傑なり。……寺中に「葦堂いぢいどう有りて以て達摩だつまを嗣ついでる」とある。陸游『入蜀記』（巻二）の七月四日の条には、この寺が南宋初めの兵火を免れたことについての言及がある。

○夫禪師 夫を復に作るテキストもあるが、宋本施注に従う。夫禪師は、応夫おうふのこと。広照禪師と号される。越州天衣山（浙江省）の義懷ぎわい禪師の法を嗣ついでぎ、初め潤州（江蘇省）の甘露寺に住し、後に真州（江蘇省）の長蘆寺に住した（『統藏經』第七八卷所収『建中靖國統燈錄』卷九）。これを後出の聞復のことと解するのは、聞復が大観（一一〇七—一〇）・政和（一一二—一八）年間の頃まで存命し、その後還俗していることや（陸游『老学庵筆記』卷七）、蘇軾が聞復を禪師と称するのが些か不自然であることなどから、無理があるろう。○問 病状が落ち着く。病気の進行が穏やかになる。『論語』子罕篇に、「子の疾やまい、病へいなり。……病やまい、問いえたり」とある。○聞復 思聰のこと。杭州の僧侶。

『蘇軾詩注解（三十二）』に収める「聰上人が寄せらるるに次韻す」詩の注を参照。○參寥 道潛のこと。參寥はその字。俗姓は何。詩僧として知られる。「僧潛が贈らるるに次韻す」詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊五六七頁）を参照。

## 二〇〇九（施三四—四六）

その一

- |   |        |   |   |  |
|---|--------|---|---|--|
| 1 | 亦知壺子不死 | 亦 <small>ま</small> た知 <small>し</small> る    | 壺 <small>こし</small> 子                   | 死 <small>し</small> せざることを                    |
| 2 | 敢問老聃所游 | 敢 <small>あ</small> えて問 <small>と</small> わんや | 老 <small>ろう</small> 聃 <small>たん</small> | の游 <small>あそ</small> ぶ所 <small>ところ</small> を |
| 3 | 瑟瑟寒松露骨 | 瑟瑟 <small>しつしつ</small> たる寒松                 | 骨 <small>ほね</small>                     | を露 <small>あ</small> わす                       |
| 4 | 眈眈病虎垂頭 | 眈眈 <small>たんたん</small> たる病虎                 | 頭 <small>こゝろ</small>                    | を垂 <small>た</small> る                        |

1 ○壺子 壺丘こきゅう子しりん林りんのこと。列子の師とされる。列子は鄭の季咸きかんという祈禱師にほれ込み、壺子に対して「先生よりもすぐれた者がいる」と告げたので、壺子は列子に季咸を連れてこさせた。壺子を見た季咸は、初めは壺子が死ぬと言ひ、もう一度見ると壺子が回復したと言ったが、それは壺子が生気の有無を自在に操っていたからであった。最

後に壺子が自分という存在の根本的本質の相を見せると、季咸は逃げ出した（『莊子』応帝王篇）。2〇老聃 老子のこと。『莊子』田子方篇に、老子の姿をみた孔子が、「向者には先生の形体、掘として槁木の若く、物を遣れ人を離れて独に立つに似たり」と言ったのに対し、老子が、「吾れ物の初めに遊べり」と答えるくだりがある。3〇瑟瑟 風がきびしく吹く音のようす。劉楨「從弟に贈る 三首」その二（『文選』卷二三）に、「亭亭たり 山上の松、瑟瑟たり 谷中の風」とある。4〇眈眈 一句 病虎を老虎に作るテキストがある。眈眈は、見おろし、にらみつけるさま。『周易』頤卦の爻辭に「六四。……虎視眈眈、其の欲逐逐たれば、咎無し」とあり、『經典釈文』に引く馬融の注に、「虎の下視する貌」とある。

あなたが生死の相を超えた壺丘子林と同じと知ったからには、老聃が遊んだ至人の境地をお尋ねするのも野暮というもの。きびしい風の吹くなか、松は痩せ細ってはいても勁さをあらわし、病んだ虎は頭を垂れつつ眼を光らせてにらんでいる。

二〇一〇（施三四―四七）

その二

- 1 莫言西蜀萬里 言う莫かれ 西蜀萬里と
- 2 且到南華一游 且く南華に到りて一游せん
- 3 扶病江邊送客 病を扶けて江邊に客を送る
- 4 杖挈浦口回頭 挈を杖てて浦口に頭を回らす

1〇西蜀 蜀（四川省）のこと。蘇軾の故郷である眉山がある。2〇南華 韶州（広東省）にある南華寺のこと。南朝梁のとき、天竺の僧智葉が韶州を訪れ、曹溪水の水を掬って味を見、この上流に勝地ありと知って宝林寺を立て

た。智葉は後にすぐれた僧がここで法を説くであろうと予言し、唐になると六祖慧能がその地に入つて改めて中興寺を立てた。宋の開宝三年（九七〇）には南華寺の号を賜つた（『輿地紀勝』卷九〇）。3〇扶病 病身でありながら強いて起き出すこと。「李邦直に答う」詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊一七頁）を参照。4〇杖屨 棹を立てる。屨は、舟を漕ぐ棹。杖は、立てること。棹を立てて舟を出そうとすること。『莊子』漁父篇に、「方に將に擘を杖てて其の船を引かんとす」とある。

ふるさとの蜀は西方万里のあなたなどとは言うまい。帰郷の前に南華寺までちよつと出かけてくるだけのこと（故郷にも難なく帰れよう）。病をおして川のほとりで旅立つ私を見送るあなた。棹を立て舟を出そうとして入り江からあなたをふりかえる私。

## 二〇一一（施三四―四八）

## その三

- 1 老去此生一訣 老い去つて 此の生 一訣  
 2 興來明日重游 興来たならば 明日 重ねて遊ばん  
 3 臥聞三老白事 臥して三老の白す事を聞けば  
 4 半夜南風打頭 半夜 南風 打頭

1 2〇老去・興來二句 訣は、別れる。永の別れをすること。二句は、一韓智翹が聞書に記す、「昨日別ルルトキ心ニ思（フ）タゾ。今相別ルルト云ヘドモ、若シ興有ル則ンバ、明日モ重（ネ）テ遊ブベシト思フタゾ」（『四河入海』卷四の四）との解釈に従つて解する。3〇三老 船尾にいて、棹をさしたり舵を取つたりする人。船頭。杜甫「悶を撥う」詩（『杜詩詳注』卷二四）に、「長年 三老 遙かに汝を憐れむ、振柁 開頭 捷神有り」とあり、南宋の蔡夢

弼らの注によれば、長年は棹をさす人、三老は舵を取る人のこと。但し、陸游『入蜀記』（巻五）九月四日の条には、「問う、「何をか長年三老と謂う」と。云う、「梢工しやうこう是れなり」と」（梢工は船頭のこと）とあり、陸游がこれによつて「長年三老」の意味を知つたという記述がある。このことにより、ここでは広く船頭の意に解する。4〇打頭 打頭風は、逆風のこと。白居易「小舫しょうぼう」詩（『白居易集箋校』巻二四）に、「黄柳の影は棹に随う月を籠め、白蘋の香は頭を打つ風に起こる」とある。

年老いた今は今生の別れかと思つたが、明日逢いたいと思つたならもう一度行つてこよう。寝ながら聞く船頭の言葉は、「こんな夜中から南の向かい風が強くては（明日も舟を出せそうにない）」。

二〇二二（施三四—四九）

六月七日泊金陵阻風得鍾山泉公書寄詩爲謝

六月七日、金陵に泊して風に阻まる。鍾山泉公の書を得たり。詩を寄せて謝を爲す

- |   |         |   |
|---|---------|---|
| 1 | 今日江頭天色惡 | 今日 <small>こんにち</small> 江頭 <small>かうとう</small> 天色 <small>てんしよく</small> 惡 <small>あ</small>                            |
| 2 | 砲車雲起風欲作 | 砲車雲 <small>ほうしやうん</small> 起 <small>お</small> こつて 風 <small>かぜ</small> 作 <small>お</small> こらんと欲 <small>ほつ</small> す   |
| 3 | 獨望鍾山喚寶公 | 獨 <small>ひと</small> り 鍾山 <small>しやうざん</small> を望 <small>のぞ</small> んで 寶公 <small>ほうこう</small> を喚 <small>よ</small> べば |
| 4 | 林間白塔如孤鶴 | 林間 <small>りんかん</small> 白塔 <small>はくとう</small> 孤鶴 <small>こかく</small> の如 <small>ごと</small> し                          |
| 5 | 寶公骨冷喚不聞 | 寶公 <small>ほうこう</small> 骨 <small>ほね</small> 冷 <small>ひ</small> ややかにして 喚 <small>よ</small> べども聞 <small>き</small> かず    |
| 6 | 却有老泉來喚人 | 却 <small>かえ</small> つて 老泉 <small>らうせん</small> の來 <small>き</small> たつて 人 <small>ひと</small> を喚 <small>よ</small> ぶ有り   |
| 7 | 電眸虎齒霹靂舌 | 電眸 <small>でんぼう</small> 虎齒 <small>こし</small> 霹靂 <small>へきれき</small> の舌 <small>した</small>                             |

- 8 爲余吹散千峯雲  
 余が爲に吹き散す 千峰の雲  
 南行萬里亦何事  
 南行 萬里 亦た何事ぞ  
 9 一酌曹溪知水味  
 曹溪を一酌して水味を知らんとなり  
 10 他年若畫蔣山圖  
 他年 若し 蔣山の図を画かば  
 11 爲作泉公喚居士  
 爲に泉公の居士を喚ぶを作せ

紹聖元年（一〇九四）、五十九歳の作。

○金陵 南京（江蘇省）の古称。○鍾山 南京の紫禁山のこと。蔣山とも称する。○泉公 鍾山の禅僧、法泉のこと。随州（湖北省）の人。仏慧の号を賜った。『五燈会元』卷一六に「蔣山法泉禅師」として伝を収める。蘇軾が嶺外に謫される途中、金陵で法泉と問答を交わして詩を遣り取りしたことは、积晝瑩『羅湖野録』卷三に記される。なお、この詩は四句毎に換韻し、韻字は、悪・作・鶴（入声十葉）、聞・人・雲（上平十一真・上平十二文の通押）、事・味・士（去声四寘・去声五末・上声四紙の通押）。併せて、王力『漢語詩律学』第二章第二十五節「古体詩的用韻（中）—通韻」を参照。

2 ○砲車雲 暴風の到来を告げるといふ云。『類説』卷五七に引く『王直方詩話』（「砲車雲」）に、「舟人 風を占うに、若し砲車雲起れば、輒ち急やかに之を避く、大風の候ち至ればなり」とある。3 ○喚 さげぶ。叫の字に作るテキストがある。ここでは、救いを求めてさげぶという感じ。○宝公 宝誌のこと（保誌とも表記する）。南朝宋から梁にかけての僧侶。若くして鍾山の道林寺に住したが、斉が興る頃から気がふれたようになり、平時から被髪、裸足で街を歩きまわった。未来を予言するとその言葉の通りになり、また分身の術を使うなどしたので、世を惑わすとして一時は斉の武帝により金陵の獄に投ぜられた。梁の武帝には尊崇され、没後は鍾山の独龍岡に葬られて、墓所には開善精舎（後の開善寺）が立てられた（『高僧伝』卷一〇）。6 ○老泉 法泉のこと。詩題の注を参照。7 ○電眸 稲妻のように鋭い眼光。『世説新語』容姿篇に、「裴令公（裴楷） 王安豊（王戎）を目すらく、「眼は爛爛として巖下の

電いなすまの如し」ととある。○虎歯 虎のように鋭い歯。『山海経』(巻二)西山経に、「西王母 其の状は人の如く、豹尾・虎歯にして善く嘯うそぶき、蓬髮ほうふつにして勝しょうを戴かたく」とある。○霹靂舌 霹靂は、急に激しく鳴るかみなり。そのよう大な音声おとこゑをいう。韓愈「瘧鬼まがきを誑せむ」(『韓昌黎集』巻七)に、「詛師そし 口牙を毒し、舌に霹靂の飛ぶを作なす」とある。8○千峰 蘇軾が嶺外に去るに当たって、越えゆくべき五嶺などの峰みねのこと。78句について一韓智翹は、「此(ノ)泉公ハ、機鋒モサカシクシテ、電眸虎歯ノ如(ク)ニシテ、説法ハ、霹靂ノ舌ヲ具(フル)ゾ。何デモアレ、求ムル所、心ニカナハヌ事ガナイ程ニ、我が為ニ、天氣ノワルイヲモ、スツトフキ散ジテ有(ル)ゾ」(『四河入海』巻一の三)と記す。10○一酌一句 天竺国の僧智葉が、曹溪水の水を一掬いして味わい、その上流に宝林寺(のちの南華寺)を立てた故事をふまえる。前掲の作品番号二〇一〇の詩の注を参照。11○蔣山 南京の紫禁山のこと。もとは鍾山といたが、三國呉の孫権が後漢末の蔣子文の廟を立てたとき、祖父の諱を避けて山名を蔣山とした(『初学記』巻八に引く「丹陽記」)。12○居士 在家の仏教信仰者のことだが、この時代では、閑居をよろこぶひとというほどの意味で使われる。「張安道が楽たのしみ主堂しゅどう」詩の注(『蘇東坡詩集』第三冊五七四頁)を参照。蘇軾は黃州流謫の際、自ら東坡居士を号している。蘇轍「亡兄子瞻端明の墓誌銘」(『欒城後集』巻二二)を参照。

今日ここ長江のほとりは天氣が悪く、砲車雲が起こつて強い風が吹き出しそうだ。私は独り鍾山を望み宝公に向かつて叫ぶ。鍾山の林には一羽の鶴に似た白塔の姿。

冷たい骨となった宝公は私の声を聞いてはくれないが、思わぬことに法泉どのが書簡をよこして私をお招きしてくださった。そしてその稲妻の眼光と虎の牙、雷の舌鋒で、私のために前途の千の峰にかかる雲を吹き払ってくれた。

南のかた万里を往くはなぜにと問われれば、曹溪の流れを酌んで一滴の水の味を知らんがため。いつか「蔣山の図」を画えがかせるようなことがあれば、これにちなんで「泉公 東坡居士を招くの図」に仕立ててください。

(担当 西岡 淳)

二〇一三（施三四一五〇）

贈清涼寺和長老

清涼寺の和長老に贈る

- 1 代北初辭沒馬塵 代北 初めて辞す 馬を没するの塵  
 2 江南來見臥雲人 江南 來り見る 雲に臥するの人  
 3 問禪不契前三語 禪を問うて契せず 前三の語  
 4 施佛空留丈六身 佛を施して空しく留む 丈六の身  
 5 老去山林徒夢想 老い去りて山林 徒に夢想  
 6 雨餘鐘鼓更清新 雨余の鐘鼓 更に清新  
 7 會須一洗黃茅瘴 會す須らく黄茅瘴を一洗すべし  
 8 未用深藏白氎巾 未だ用いず 深く白氎巾を藏するを

紹聖元年（一〇九四）、五十九歳の作。六月五日に惠州（広東省）安置を命じられ、惠州に向かう途上、金陵（南京市）での作。

○清涼寺 寺院の名。金陵西郊の清涼山にある。宋・王象之『輿地紀勝』卷一七「建康府」の条によれば、五代十国の呉のときは興教寺といい、南唐のときに石城清涼禪寺、北宋の太平興國年間に清涼寺と改称された。○和長老 清涼寺の僧。蘇軾には後に「旧韻に次して清涼長老に贈る」詩（『合注』卷四五）があり、両者は同じ人物と思われるが、伝は未詳。

1〇代北 代州（山西省）の北方。ここでは定州をさす。「蘇軾詩注解（二十九）」に収める、作品番号一九七二・一九七六の詩の注を参照。2〇臥雲 隱遁生活をする事。李白「駕 温泉宮を去つて後、楊山人に贈る」詩（『李太白全集』巻八）に、「吾が節を尽くして明主に報ずるを待つて、然る後 相携えて白雲に臥せん」とある。白居易「元郎中と同じく朝散大夫を制加せられ、懷を書して贈られしに酬ゆ」詩（『白居易集箋校』巻一九）に、「身を終わるまで臥雲の伴と作らんと擬す、月を逐いて須らく薬を焼く銭を収むべし」とある。3〇問禪一句 問禪は、禪の理を問うこと。宋・釈延一『広清涼伝』（『大正藏』第五一卷）巻中「無著和尚化般若寺に入る」の条によれば、釈無著は清涼嶺に至り、ある寺に入つて、主僧と問答する際に寺の雲水の人数を問うと、主僧は「前三三と後三三」と答えた。無著が「解せず」と返すと、主僧は「既に解せざれば、速やかに須らく引き去るべし、宜しく久しく止まるべきこと無し」と、帰るように言われ、童子に見送りをさせた。寺を出て童子にその寺の名を問うと、「清涼寺」と答える。そして童子に再び「前三三と後三三」の意味を聞かれ、やはり「解せず」と答えた後、童子の合図により振り返つてみると、寺の姿はなかったという。4〇丈六身 高さ一丈六尺の仏像。釈迦の身長が一丈六尺であつたとされることによる。袁宏『後漢紀』巻一〇「孝明皇帝紀下」に、「仏は身の長一丈六尺にして、黄金の色、項中に日月の光を佩し、变化方無く、入らざる所無し」とある。蘇軾「阿弥陀佛の贊」（『蘇軾文集』巻二一）に、「蘇軾の妻王氏、名は閨之、字は季章、年四十六。元祐八年八月一日、京師に卒す。臨終の夕べ、遺言して受用する所を捨し、其の子邁、追、過をして為に阿弥陀佛像を画かしむ。紹聖元年六月九日、像成り、金陵の清涼寺に奉安す」とある。『景定建康志』巻四六「清涼広惠禪寺」の条に、「東坡嘗て弥陀の画像を寺中に捨す」とある。5〇山林 人里離れたところ。ここでは清涼寺を指す。嵇康「山巨源に与うる絶交の書」（『文選』巻四三）に、「故に朝廷に処りて出でず、山林に入りて反らざるの論有り」とある。7会須一句 会須は、ぜひ……すべきの意。黄茅瘴は、ちがやが枯れて黄ばむころに起きる南方の風土病。晉・嵇含「南方草木状」巻上に、「芒茅枯るる時、瘴疫大いに作る。交・広皆な爾り。土人呼びて黄茅瘴と曰い、又た黄芒瘴と曰う」とある。8〇白氈巾 木綿で作つた頭巾。僧侶が多く用いる。杜甫「大雲寺の贊公の房四首」その二（『杜詩詳注』巻四）に、「細軟なる青糸の履、光明なる白氈巾」とある。

馬が見えなくなるほど砂塵のすさまじい河北をようやく離れて、江南の別天地に住んでいる高僧の和長老にお会いした。禪の問答になるとその奥深い旨は理解できないが、亡妻のため布施としてもかく御仏の画像を奉納した。

年老いて山林に隠遁することをただひたすらに願っている身には、雨上がりにお寺の鐘鼓の響きがいつそう清らかに聞こえる。きつとまたここに来て嶺南の瘴癘の気をきれいに洗い流してしまおう、白い木綿の頭巾を惜しまずにわが身にもお貸しくくださるようにな。

二〇一四（施三四一五二）

予前後守倅餘杭凡五年夏秋之間蒸熱不可過獨中和堂東南頰下瞰海門洞視萬里三伏常蕭然也紹聖元年六月舟行赴嶺外熱甚忽憶此處而作是詩

予 前後余杭に守倅たること凡そ五年。夏秋の間、蒸熱過ごす可からず。ひとり中和堂の東南の頰は、海門を下瞰し、万里を洞視し、三伏にも常に蕭然たり。紹聖元年六月、舟行して嶺外に赴くに、熱甚し。忽ち此の処を憶うて、是の詩を作る

- 1 忠孝王家千柱宮 ちゆうこうおうか せんちゆう きゆう
- 2 東坡作吏五年中 とうば ありとな ごねん うち
- 3 中和堂上東南頰 ちゆうわ どうじやう とうなん けい
- 4 獨有人間萬里風 ひとり じんかん ばんり かせあ

紹聖元年（一〇九四）、五十九歳の作。惠州に向う途上の作。

○守倅 守は、太守。倅は、通判。余杭は、杭州の西にある地名だが、ここでは杭州をさす。蘇軾は熙寧四年から七年まで杭州通判、元祐四年から六年まで杭州知事の任に在った。○中和堂 宋・王象之『輿地紀勝』卷二「臨安府」の条および田汝成『西湖遊覽志』卷七によれば、唐代以後、杭州府邸は鳳凰山の麓に置かれ、中和堂もそこにあった。もと後周の武肅王錢鏐が建てた閼札堂を、宋の孫沔が中和堂と更めたという。○頰 正室の側の部屋。王注趙次公に、「頰の字、内地の常語に、宮室の房を頰と曰う、猶お人の頰頰のごとし」とある。○海門 陸地に挟まれた狭い海。海峡。○洞視 明らかに見通す。○三伏 初伏（夏至の後の三番目の庚の日）、中伏（四番目の庚の日）、末伏（立秋後の最初の庚の日）をいう。一年で最も暑さのきびしい時期とされる。

1○忠孝一句 忠孝王は、呉越王錢俶を指す。『統資治通鑑長編』卷二九に、（端拱元年八月戊寅）「錢俶卒す。……秦國公を追封し、忠懿と諡す」とある。○千柱 千本の柱を持つ宏大な建物。「景純 和せらる。復た次韻して之に贈る」詩の注（『蘇東坡詩集』第三冊二三四頁）を参照。4○万里風 晉・成公綏「嘯の賦」（『文選』卷一八）に、「遊雲を泰清に飄し、長風を万里に集む」とある。杜甫「夏夜の嘆」詩（『杜詩詳注』卷七）に、「安くにか万里の風の、飄飄として我が裳を吹くを得ん」とある。

かつて呉越王が建てた千本の柱が立ち並ぶ立派な宮殿があり、私はそこに役人として五年も勤めていた。中和堂の東南側のあの部屋は、俗世間にはないはずの万里の風が吹いてきてまことに涼しかった。

（担当 蔡毅）

二〇一五・二〇一七・二〇一九（施三四―五二・五四―五六）

慈湖夾阻風五首

## 慈湖夾にて風に阻まる 五首

二〇一五（施三四一五二）

その一

- 1 捍索桅竿立嘯空 捍索 桅竿 立つて空に嘯き  
 2 篙師酣寢浪花中 篙師 酣寢す 浪花の中  
 3 故應蒼蒯知心腹 故より心に蒼蒯の心腹を知るべし  
 4 弱纜能爭萬里風 弱纜 能く争う 万里の風

紹聖元年（一〇九四）、五十九歳の作。

○慈湖夾阻風 慈湖夾は、当塗県（安徽省）の北にある。五首のその二は『蘇東坡詩選』（小川環樹・山本和義選訳

岩波文庫）二六八頁に収める。その詩題の注を参照。

1 ○捍索 もやい綱。蘇軾「淮を過る 三首 景山に贈りて兼ねて子由に寄す」その一（『合注』卷一八）に「晩に洪沢の口に来たれば、捍索 響くこと雷の如し」とあり、王注（趙堯卿）に「舟に捍索有り、行けば則ち舟より墜とし、住まれば則ち纜と為す」とある。○桅竿 帆柱。『広韻』上平声十五灰に「桅は、小船の上の櫓竿なり」とある。

2 ○篙師 船頭。杜甫「水会渡」詩（『杜詩詳注』卷九）に「篙師 楫を理むるを暗んじ、歌笑して波瀾を軽んず」とある。○浪花 波の花。杜甫「諸貴公子の丈八溝に妓を携えて涼を納るるに陪し晩際にて雨に遇う 二首」その二（『杜詩詳注』卷三）に「纜は堤柳を侵して繋ぎ、幔巻きて浪花浮く」とある。3 ○故心一句 蒼蒯は、チガヤやアブラガヤ。繩の材料になる。蘇軾「十月二日 將に渦口に至らんとする五里所にして風に遇い留まって宿す」詩に「舟人 更がわる伝呼し、弱纜 蒼蒯を恃む」とある。その注（『蘇東坡詩集』第二冊二〇〇頁）を参照。心腹は、心の

うち。『尚書』盤庚下に「今、予 其れ心腹腎腸を敷き、歴く爾百姓に朕が志を告ぐ」とある。一句は、2句に詠んだ篙師酣寝のさまをうけて、荒波の中でも船頭が動じずにいられるのは、もやい綱の心を知っているからだとして、綱に対する信頼感を述べている。4〇弱纜 弱いともづな。杜甫「水宿 興を遣る、群公に呈し奉る」詩（『杜詩詳注』巻二一）に「小江 還た積浪あり、弱纜 且つ長堤にす」とある。〇万里風 万里をわたる風。本注解に収める作品番号二〇一四の詩の注を参照。

もやい綱を結んだ帆柱が突っ立って空中で唸っているのに、船頭は波に揺られて眠りこけている。（船頭は）ちがやで絢なったなわの心がわかるはずだから、頼りないともづなで、万里をわたる強い風とうまくやっていくのだ。

二〇一七（施三四―五四）

その三

- 1 我行都是退之詩 我わがこう行すべ 都こて是これれ退たい之しが詩
- 2 眞有人家水半扉 眞まことに人家じんか 水みづ 半扉はんびなる有あり
- 3 千頃桑麻在船底 千頃せんけい桑麻そうま 船底せんていに在あり
- 4 空餘石髮掛魚衣 空むなしく石髮せきはつを余あまして魚衣ぎよいを掛かく

1 2〇我行・眞有二句 退之は、韓愈の字。退之詩は、韓愈「曾江口に宿し、姪孫湘に示す 二首」その一（『韓昌黎集』巻六）をいう。韓愈が元和十四（八一九）年、「仏骨を論ずる表」を上ったことで罪を獲て潮州へ左遷されて赴く途中、曾江の河口が大水で氾濫したのに遭遇し詠んだもの。その詩に「暮宿 民村に投ずれば、高処 水 半扉」とある。二句は、慈湖夾で風雨のため足止めされている蘇軾自らの状況を、韓愈の詩をめぐる状況に重ねている。

3 4 ○千頃・空余二句 千頃は、極めて広大なさまをいう。『蘇軾詩注解(五)』に収める作品番号一六五二の詩の注を参照。桑麻は、桑と麻。ひいて、桑麻を植える土地をいう。蘇軾「超然台の記」(『蘇軾文集』巻一一)に「湖山の觀に背きて、桑麻の野を行く」とある。石髪は、水苔。『爾雅』積草に「薄は、石衣なり」とあり、その郭璞の注に「水苔なり。一に石髪と名づく。江東、之を食らう」とある。また、『藝文類聚』巻八二に引く晉・周処「風土記」に「石髪は、水衣なり。青綠色にして、皆な石に生ず」とある。魚衣は、水苔。『周礼』天官「醢人」に「豆に加うるの実に、…：箝菹(あり)」とあり、鄭玄は鄭司農の注を引いて「箝は、水中の魚衣なり」と注する。二句は、桑や麻を植えた土地が浸水したさまを述べている。

わたしのこの旅はまったくあの韓退之の詩そのもので、じつに人家の扉半分の高さまで浸水しているところもあった。桑と麻を植えた一面の田野も船底の下となり、ただ石髪や魚衣といった水苔をひっかけるばかり。

## 二〇一八(施三四—五五)

その四

- |   |         |       |              |
|---|---------|-------|--------------|
| 1 | 日輪亭午汗珠融 | 日輪亭午  | 汗珠融る         |
| 2 | 誰識南訛長養功 | 誰か識らん | 南訛長養の功       |
| 3 | 暴雨過雲聊一快 | 暴雨過雲  | 聊か一快         |
| 4 | 未妨明月却當空 | 未だ妨げず | 明月の却つて空に當たるを |

1 ○日輪一句 日輪は、太陽のこと。『列子』湯問篇に「日の初めて出づるや、大いさ車輪の如し」(『初学記』巻一に引く『列子』による。通行本は、車輪を車蓋に作る)とある。北周・庾信「鏡の賦」(『庾子山集』巻二)に「天河漸く没し、日輪 將に起こらんとす」とある。また、韓愈「恵師を送る」詩(『韓昌黎集』巻二)に「夜半に起ちて

下視すれば、溟波 日輪を銜む」とある。亭午は、正午。蘇軾「十月十六日 見る所を記す」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊一四五頁）を参照。汗珠は、たらたら滴る汗。晉・傅咸「涼に感ずるの賦」（『藝文類聚』）卷五）に「汗玉体に珠のごとく隕ちて、粉として身に附して沾凝す」とある。融は、通る。何晏「景福殿の賦」（『文選』）卷一一）に「雲行き雨施し、品物咸な融る」とあり、その李善注に「融は、猶お通のごとし」とある。汗珠融は、汗をたらたら流すさまをいう。蘇軾「子由が去歳、拳人を洛下に試みて寄する所の詩に和す 五首 暴雨 初めて晴る 楼上の晚景」その三（『蘇東坡詩集』第二冊五七五頁）に「白汗 漿を翻す 午景の前、雨余の風物 便ち蕭然たり」とあり、一句は、その1句目と似る。2〇南訛 南方における化育。『尚書』堯典に「申ねて羲叔に命じ、南交に宅す。南訛を平秩す」とあり、その孔安国伝に「訛は、化なり。夏を掌るの官、南方の化育の事を平秩す」とある。〇長養 いくつくしみ育てることをいう。『荀子』非十二子篇に「人民を長養し、兼ねて天下を利す」とある。3〇暴雨 激しいにわか雨。『礼記』月令に「孟春に」秋令を行なえば則ち……森風暴雨総て至る」とある。〇過雲 過雲雨。にわか雨。元稹「閑 二首」その一（『元稹集』）卷一四）に「江は過雲雨に喧しく、船は打頭風に泊まる」とある。4〇未妨一句 梅堯臣「高車 再び過る、永叔内翰に謝す」詩（『宛陵先生集』）卷四八）に「此れを以て彼れに易えて媿すること勿かる可し、浮榮 雨虹を送るが若き有り。須臾にして断滅して復た見えず、唯だ明月の常に空に当たる有るのみ」とある。一句は、3句で、激しい夕立ちで昼間の暑気が、さっと掃き清められる爽快さを述べたのをうけて、こうした宵は、梅堯臣が詩に詠じたように、明るく輝く月が空に在るのも悪くはない、としている。

太陽が中天に達する頃、珠のような汗が噴き出す、南方の炎暑が万物を育む恵みなど知ったことではない。雲が湧き起こりにわか雨が降ってやつと一息、明るく輝く月が空にのぼるのも悪くはない。

二〇一九（施三四一五六）

その五

- 1 臥看落月横千丈 臥して看れば 落月 千丈に横たわり  
 2 起喚清風得半帆 起きて清風を喚びて 半帆を得たり  
 3 且竝水村敲側過 且つ水村に並んで敲側して過ぎん  
 4 人間何處不巉巖 人間 何れの処か巉巖ならざる

1〇落月 西に傾いた月。蘇軾「僧潜せんが贈らるるに次韻す」詩に「摩尼まにを乞い取って濁水を照らし、共に落月 金盃の傾くを看ん」とあり、その注（『蘇東坡詩集』第四冊五七四頁）を参照。〇千丈 長江の水の深さをいう。白居易「初めて峽に入りて感じるごと有り」詩（『白居易集箋校』巻一一）に「上に万仞の山有り、下に千丈の水有り」とある。  
 2〇起喚一句 清風は、すがすがしい風。蘇軾「前赤壁の賦」に「清風 徐おもむろに來たつて、水波 興おこらず」（『蘇東坡詩選』三一五頁）とある。一句では、朝早くに吹く、航行によい風をいう。半帆は、帆柱の半ばまで帆を挙げること。  
 3〇水村 水辺の村。杜牧「江南の春 絶句」（『樊川文集』巻三）に「千里 鶯啼いて 緑 紅くれなゐに映ず、水村 山郭 酒旗の風」とある。〇敲側 敲は、かたむく。敲側は、水が急なため舟体がかたむくことをいう。杜甫「閩水の歌」（『杜詩詳注』巻一三）「巴童 漿を蕩うごかして敲側して過ぎ、水鶏 魚を銜くみて來去して飛ぶ」とある。4〇人間一句 人間は、人の世。巉巖は、険しい岩山。ひいて、けわしくそそり立つ岩山のさま。蘇軾「峽を出づ」詩に「峽に入つては巉巖を喜び、峽を出でては平曠を愛す」とあり、その注（『蘇東坡詩集』第一冊一三三頁）を参照。

西のほうへ傾いた月が千丈の（深さの）長江の水の中に沈んでいくのを寝ながら眺め、いい風が吹いて來たという声がして起きると、船は帆を半ばまで挙げて（漕ぎ出す）。まずは水辺の村々に沿って、船をかたむけて急流を航わたって行こう、この世のどこにも険しくない場所などないのだから。

（担当 原田直枝）

二〇二〇（施三四一五七）

過廬山下并引

廬山の下を過ぐ 并びに引

予過廬山下、雲物騰涌、默有禱焉、未午、衆峯凜然、故作是詩、  
廬山の下を過ぐるに、雲物騰湧す。黙して禱ること有り。未だ午ならざるに、衆峰凜然たり、  
故に是の詩を作る

紹聖元年（一〇九四）、五十九歳の作。

○廬山 江西省九江県の南にある山。多くの峰から成る。その名は、周代のひと匡俗がこの山に廬を結び、後に登仙して廬だけがのこされたことに因むという（『太平御覧』巻四一に引く『廬山記』）。匡廬、匡山とも呼ばれる。○雲物 雲の形や色彩。○騰湧 おどりがあがる。○凜然 きりつとしたさま。

廬山のふもとを通ったとき、山には湧き立つような雲がかかっていた。私は黙ったままで祈りをささげた。すると昼前には、廬山の峰みねがきりりとした姿をあらわした。そこでこの詩を作った。

- 1 亂雲欲羸山 乱雲 山を羸めんと欲す
- 2 勢與飄風南 勢いは飄風と南す
- 3 羣相應和 群がり隣りて相応和し
- 4 勇往爭驂驪 勇み往きて争つて驂驪たり
- 5 可憐蒼蔚中 可憐れむ可し 蒼蔚の中

- 6 時出紫翠嵐  
 7 雁沒失東嶺  
 8 龍騰見西龕  
 9 一時供坐笑  
 10 百態變立談  
 11 暴雨破垓圯  
 12 清颿掃渾酣  
 13 廓然歸何處  
 14 陋矣安足戡  
 15 亭亭紫霄峯  
 16 窈窕白石菴  
 17 五老數松雪  
 18 雙溪落天潭  
 19 雖云默禱應  
 20 顧有移文慙
- 時に紫翠の嵐を出だす  
 雁のごとく没して東嶺を失い  
 龍のごとく騰がりて西龕を見る  
 一時 坐笑に供し  
 百態 立談に変ず  
 暴雨 垓圯を破り  
 清颿 渾酣を掃う  
 廓然として何れの処にか帰する  
 陋しいかな 安くんぞ戡つに足らん  
 亭亭たり 紫霄峰  
 窈窕たり 白石菴  
 五老 松雪を数え  
 双溪 天潭より落つ  
 默禱の応と云うと 雖も  
 顧みるに移文の慙有り

1 ○霾 字音バイ。もと、大風が土砂を巻きあげて降らせる（「つちふる」）意だが、ここでは、うずめること。『楚辞』九歌「国殇」に、「西輪を霾めて四馬を繫ぎ、玉枹を援りて鳴鼓を撃つ」とある。2 ○颿風 つむじかぜ。『詩経』大雅（生民之什）「卷阿」に、「卷たる阿有り、颿風 南自りす」とある。3 ○躋 のぼる。気や虹などが立ちのぼるこ

と。『詩経』鄘風「蝦蟇」に、「朝に西に墜れば、朝を崇うるまで其れ雨ふる」（蝦蟇は虹の意）とある。4○驂驪馬が疾走するさま。杜甫「酔いて馬より墮つるを為す、諸公 酒を携えて相看る」詩（『杜詩詳注』巻一八）に、「朱汗 驂驪 猶お玉を噴くに、虞らざりき 一蹶して終に損傷せんとは」とある。5○曹蔚 雲のさかんに湧きあがるさま。『詩経』曹風「候人」に、「蒼たり蔚たり、南山に朝に墜る」とある。6○紫翠嵐 木々が紫や翠にしげった山のけしき。嵐は、山にかかるともや。杜牧「早春、閣下に寓直し、蕭九舎人も亦た内署に直す、因りて書懷を寄す 四韻」詩（『樊川文集』巻二）に、「千峰 紫翠を横たえ、双闕 欄干に憑る」とある。また、「池州の弄水亭に題す」詩（『樊川文集』巻二）に、「綺席 草は芊芊、紫嵐 峰は伍伍」とある。78○雁没・龍騰二句 一韓智翹は、「サテアソコニ今マデアツタル峰ガ、チャツト失シテ見（エ）サルハ、雁ノ没スルガ如（ク）ナゾ。サテココナル山ノ峰ノ西ノ方ニチャツト見ユルルハ、龍ノ騰（ガル）ガ如クナゾ。……龕ハ峰ヲ云（フ）ゾ」と記す（『四河入海』巻一の三）。龕は仏塔の意で、ここでは峰をかく見立てたのであろう。10○立談 時間がきわめて短いことのとえ。『漢書』揚雄伝（『解嘲』）に、「或いは七十に説くも遇わず、或いは立談にして侯に封ぜらる」とある。11○塊圮 際限のないさま。『漢書』賈誼伝（『鵬鳥の賦』）に、「大鈞物を播き、塊圮として垠無し」とある。一句について一韓智翹は、「サテニワカニ雨ガフリテ、塵埃ノ塊圮タルヲ破ルゾ」と記す。12○清颯 さわやかな大風。晉・成公綏「嘯の賦」（『文選』巻一八）に、「南箕 穹蒼に動き、清颯 喬木に振るう」とある。○渾酣 見ない語だが、濁り乱れるさまをいうか。一韓智翹は一句を、「風ガ吹（イ）テ、クモリタル雲ヲスト吹（キ）掃（フ）ゾ」と記す。13○廓然 からつとして何もなないさま。陶淵明「従弟敬遠を祭る文」（『陶淵明集』巻五）に、「庭樹は故の如く、齋宇は廓然たり」とある。14○戡 字音カン。戦いに勝って平定する。15○亭亭 高くそびえ立つさま。「望夫台」詩の注（『蘇東坡詩集』第一冊七八頁）を参照。○紫霄峰 廬山の峰の一つ。宋・陳舜俞「廬山記」巻三に、「一簡寂」観は、白雲峰の下に在り。其の間の一峰、独り出でて秀卓なる者をば紫霄峰と曰う」とある。16○窈窕 奥深いさま。○白石菴 廬山にあるいおりの名。『廬山記』巻三に、「万寿（院）由り復た出でて南に行くこと三里、楞伽院に至る。旧と下白石と名づく。……楞伽の東由り山に上ること三里、証道院に至る。旧と上白石と名づく」とある。17○五老 廬山の峰の

名。『太平寰宇記』（卷一一一）江州德化県の条に、「五老峰は、廬山の東に在り。懸崖の突出すること、五人相逐いて羅列するの状の如し」とある。李白「廬山の五老峰を望む」（『李太白全集』）詩に、「廬山東南の五老峰、青天削り出だす 金芙蓉」とある。○松雪 松の樹に積もった雪。顔延之「王太常に贈る」詩（『文選』卷二六）に、「庭は昏くして野陰を見、山は明るくして松雪を望む」とある。18○双溪 廬山の溪流の名と思われるが未詳（『廬山記』卷二に、宝巖禅院の旧名としての「双溪」が見える）。『廬山記』卷二に、「草堂を過ぎて、半山に二泉有り、山石の間、名づけて双玉澗と曰う」（草堂は、白居易が香爐峰下に置いた草堂）とあり、王注もこの部分を引く。○天潭 天上に深く水を湛えた澗。蘇軾以前に用例を見ない。19○默禱心 韓愈「衡嶽廟に謁し、遂に嶽寺に宿して、門樓に題す」（『韓昌黎集』卷三）詩に、「我れ来たつて正に逢う 秋雨の節、陰気晦昧にして清風無し、心を潜めて默禱すれば応有るが若し、豈に正直の能く感通するに非ざらんや」とある。唐の貞元十九年（八〇三）、連州（広東省）の陽山の令に貶せられた韓愈は、二年後に赦されて陽山を離れ、北に向かった。その途上で衡山（南嶽）の廟に詣でたところ、悪天候に妨げられて全く見えなかった衡山が姿をあらわした。『蘇軾詩注解（三十二）』に収める「臨城道中 并びに引」の注を参照。20○移文 告知の回状（まわしぶみ・ふれぶみ）のこと。孔稚珪「北山移文」（『文選』卷四三）は、もと建康（南京）郊外の鍾山に隠棲した南斉の周顒が、朝廷からの招請に応じて山から出たことを、鍾山の山霊の口を借りて糾弾するという内容。「喬 将に行かんとし、鵝鹿を烹……」詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊八四頁）を参照。一韓智翹は、「言（フココロ）ハ、坡 廬山ニ帰ラズシテ茲ニ来タリ。故ニ移文ノ愧有リ。周顒ヲ以テ自ラ比スルナリ」と記す。

山を覆わんばかりの乱れ雲が、つむじ風とともに南にやってきました。調子を合わせて群れをなし山にのぼる。勇んで争い往くそのさまはまるで奔馬が駆けるようだ。そうして雲が湧きたつなかに、いつとき姿を見せる紫や翠の山容がすばらしい。飛びゆく雁が見えなくなるように東の嶺は姿を消し、昇り龍があらわれるように西の峰が姿を見せる。

そんなふうになん万化する雲のようですが、わずかな間に目に入ることが見る者を楽しませてくれる。さて際限なく広がっていた土ほこりをにわか雨が破って洗い流し、一帯を覆っていた乱れ雲もさわやかな大風に吹きわたされた。きれいさっぱり、どこに消えたのかと思つたが、つまらぬ雲などと張り合うまでもないというものだ。

高くそびえ立つ紫霄峰、山肌の奥深くには白石庵。五老峰は松においた雪までもが手に取るように見え、双玉潤のせせらぎは天の潭ふちが流れ落ちたもの。

このように黙して祈つたしるしはあつたというもの、恥ずかしながら宦遊の身、世に出たことを非難する回状をまわされても仕方あるまい。

(担当 西岡 淳)